

武漢における郁達夫 抗日をめぐる

Yu Dafu in Wuhan Study on his Resistance Against Japan

池上 貞子*

Sadako Ikegami

はじめに

現在の中国で「現代文学」と言う時、それは五・四運動（1919）以降、中華人民共和国成立（1949）までの文学を指し、それ以後すなわち解放後の文学は「当代文学」と呼んで区別される。しかし歴史的な区分は五・四運動以降現在に至るまでを「現代」とするのであるから、「当代文学」をも含めた広い意味の現代文学という言葉も可能だと思う。当論文では専ら後者に従う。

ところで現代文学を担う文芸作家の構成を見ると、まず「老作家」と呼ばれる、解放前すでに作家として活躍していた人たちがいる。かれらの中には、抗日戦争（狭義には1937-1945）以前すでに作家であった人たちと、抗日戦争を契機として、作家に成長していった人たちがあつた。後者には延安のいわゆる解放区（中国共産党支配区）と白区（国民党支配区）があつた。また解放後作家の道を歩み始めたかなりの人たちが、反右派闘争（1957）に巻き込まれ、20余年を失意のうちに水面下で生きてが、1979年ごろから復活し、いろいろな意味で現在の中国文学界におけるヘゲモニーを握りつつある。それと文化大革命（1966-1976）後、自らの内部に

残る文革の傷跡を見つめ続ける人たちがいる。その文革が終わって（元凶と言われた四人組が失脚して）10年、現在は、近代化（原語は「現代化」）、対外開放政策の申し子も生まれつつある。もちろん文化大革命の期間、高い評価を受けた作家群も、然るべき位置づけを忘れてはならないだろう。

現代中国において、とりわけ「老作家」とっては、その人生の途上で、内面に係わる変革を外から迫られたことが何度かあつたであろうことは、想像に難くない。事象的に言えば、社会主義国家中華人民共和国の成立はその最たるものであろう。しかし、作家の係わる範囲がより内面的なものである時、それはむしろもっと以前、例えば抗日戦争の時期などの方が、いっそう強力なインパクトを与えたのではないだろうか。

本論にとりあげようとする郁達夫（いく・たつぷ、Yu Dafu, 1896-1945）は20年代初期に創作を開始し、抗日戦争以前にすでに影響力のある存在であつた。大正デモクラシーの最中の日本に10年近く留学し、知日家であつた彼にも、やがて時代は抗日を迫り、そしてシンガポールへと追いやっていく。彼の例は先に述べた作家の自己変革を探る典型にはならないかもしれ

*一般教育等

ないが、またそれだからこそ見える部分もあるだろう。本論では、その曲り角にあたる武漢時代に焦点を定め、そこから投げかけてくる問題を考えたい。

1. 郁達夫略歴⁽¹⁾

1896年、浙江省富陽県に生まれる。富陽は山水に恵まれた風光明媚な所として知られ、郁達夫自身もしばしば著作などで故郷の美しさに言及している。彼のロマンチックな作風の原点はここにあるとも言えよう。名は文で、達夫は字である。代々読書人の家柄であるが、太平天国の乱(1850～1854)以後没落していた。三歳の時に父を失う。書塾で旧式の教育を受けた後、県立の小学校で学ぶ。中学は二、三の学校を転々とし、ミッション系の学校で、ストライキ事件に関連して退学処分を受ける。辛亥革命(1911)前後は、もっぱら家で独学に励んでいたようだ。

1913年、司法制度視察のため日本に派遣された長兄に従い、東京へ。中学課程の補習と日本語学習を平行して行ない、翌夏一高の予科に入学する。1915年、八高入学。最初長兄の勧めで医科を志すが、翌年文科に転じる。名古屋での4年間に、露、独、日、英、仏の小説(ほとんど原文)一千部を読破したと言う。初期の代表作「沈淪」(1921)はこの頃の生活を描いている。漢詩人服部擔風の門下に入り、漢詩作や詩友との交遊が多かった。この間のことは、稲葉昭二著『郁達夫——その青春と詩』(東方書店、1982)に詳しい。

1919年、東京帝国大学経済学部に入學。この頃、田漢の仲介で、佐藤春夫との交友始まる。20年夏、一時帰国して、同郷の孫荅と因襲的な結婚をする。張資平、成仿吾(いずれも当時東大在学中)、田漢(東京高師)、郭沫若(九大)らと、純文芸雑誌発行の相談をする。後の創造社である。創作開始。21年夏、上海で創造社設

立準備の仕事に携わる一方、安慶(安徽省)の法政学校で英語を教える。

22年春、卒業試験のため東京に戻る。卒業。7月20日、最終的に帰国。安慶で一時期妻子と同居するが、23年春法政学校を辞した後、再び故郷に帰す。上海で雑誌の編集と創作に専念。秋、北京大学で統計学を講じるべく、北京に赴く。しばらく創造社から遠ざかる。再び妻子と同居する。25年1月、武昌師範大学教授になるが、学内抗争に耐えきれず、秋には上海に出る。病気。一時故郷に帰省して療養し、その間上海との間を往復する。再び創造社の活動に参加するが、その頃、五・三〇事件を契機とする国民革命の潮の高まりの中で、創造社も若い日本留学生を中心に急旋回し、革命文学を標榜するようになる。

1926年3月、郭沫若、王独清と共に、革命の中心広東に行き、広東大学の教壇に立つ。6月に長男病死。悲しみの夏を、北京の妻子の許で過す。秋、上海を経て広東に戻るが、軍閥と変わらない革命内部の腐敗した状況に幻滅する。創造社出版部の整理という任務もあって、12月広東を離れ、上海へ赴く。名作「過去」や、創造社や郭沫若と離れる要因となる「廣州事情」などを書く。

1927年1月、友人孫百剛の家で、杭州から来た若い王映霞と会う。創造社出版部の内紛や蔣介石による反共クーデター(4月12日)など囂しいなかで、この半年間の生活は、王映霞との恋愛が大きな比重を占める。しばしば日記を雑誌に公開し、後に「日記九種」としてまとめる。紆余曲折を経て、6月に結婚を発表。7月、佐藤春夫が夫人と妹を伴って、上海に来る。半月ほど接待に忙殺される。

その後、胡適らの新月派や現代評論派にも接近する。語絲社の魯迅らと親しくし、また林語堂主編の雑誌などにも寄稿する。1930年2月に

成立した「中国左翼作家連盟」の発起人に名を連ねるが、あまり活動しなかったようだ。

満州事変（1931年9月）、上海事変（1932年1月）などを契機に、上海の文化界では抗日の気運が高まる。郁はそれらに参加しながらも、33年杭州に居を移し、翌年杭省府参議となる。各地を巡遊すること多く、遊記を多く書く。週に2度、上海の大学で教えていたらしい。1936年2月、福建省主席陳儀に招かれて、福州に行き、参議として留まる。名士として交遊多く、遊記も多い。

1936年11月、14年ぶりに来日。日本の出版社に招かれたとも、福建省政府の用で印刷機械を購入しに来たともされたが、事実は市川に亡命中の郭沫若との接触という密命があったようだ。各界の日本人と精力的に接触、中国の現況について語り、書く。12月中に、台湾経由で福州に戻る。王映霞と子供を呼び寄せるが、王は半年ほどで杭州へ戻る。一般に王が土地になじめなかったためとされるが、日中戦争の勃発や、もっと複雑な事情がからんでいたようだ。この頃から不和が生じはじめる。

37年7月、蘆溝橋事件。第二次国共合作成る。38年初、郭沫若から、政治の中心、抗日運動の拠点となった武漢へ呼ばれる。杭州付近に疎開した妻子を伴って、3月に武漢に入る。中華全国文芸界抗敵協会や軍事委員会政治部第三庁（宣伝工作）の仕事を行なうが、不本意なところもあったようだ。王映霞との不和がスキャンダル化する。9月、福州に戻り、その後シンガポール行きを決意する。武漢陥落後の混乱の中、急きょ呼びよせた王映霞と、2人の子を伴って、12月末シンガポールに着く。『星州日報副刊』その他の編集および評論活動を行う。香港の『大風旬刊』30期（1939年3月）に、王映霞の不倫をそしめるような「毀家詩記」を発表。王も「長い手紙の始まり」などを書いて泥仕合

になる。破局。40年、王は一人でシンガポールを離れる。

太平洋戦争勃発後、華僑抗戦委員会執行委員、文化界抗日連合界主席などの任に就く。42年2月初、息子を重慶へ向けて発たせた後、陥落直前のシンガポールを、数人で小船で脱出する。5月、スマトラ島バヤコンブに落ち着く。趙廉という偽名で通す。日本軍ブチキンギ憲兵隊の通訳を半年ほど勤める。その後、酒造工場を始めたり、現地華僑の娘何麗有と結婚したりなどしてカムフラージュを図るが、44年の初め頃、郁達夫であるという密告がなされたらしい。

1945年8月末、夜自宅より何者かに呼び出され、そのまま行方不明になる。その後の調査で、口封じのために日本憲兵に殺されたことが確認されている。

2. 「第三庁」と「文協」

1937年7月7日の蘆溝橋事件以後、日本の中国への軍事侵略は全国的規模で拡大された。満州事変以来、抗日救亡運動の中心であった上海は、8月13日の激しい攻防戦の末、周囲はみな陥落し、「孤島」の状態に陥る。首都南京が陥落する（12月13日）と、政府と国民党中央党部は重慶に移るが、野党党首や文芸界、教育界、科学界の著名人および抗日青年たちは、続々と武漢に集まった。そして抗日のためのさまざまな組織が作られた。本章では、郁達夫の関与した2つの組織、国民政府軍事委員会政治部第三庁すなわち「第三庁」と、中華全国文芸界抗敵協会すなわち「文協」の、初期の状況についてふれる。

国共合作政策により、国民党の軍事・政治組織の拡大改編が行われ、政府軍事委員会の下に政治部がおかれることになった。部長は国民党側を代表して、当時湖北省主席であった陳誠が兼任する。彼は軍人で、本人は反共主義者であ

るが、国民党左派や第三党人士たちとも親しかったと言われる。副部長には共産党代表の周恩来と、第三党代表の黄琪翔が任に就く。1938年2月1日成立。

その下に、宣伝工作を受けもつ部署として、第三庁がおかれた。その庁長のポストをめぐる、国民党と共産党のかけ引きがあったようだが、結局共産党側の郭沫若に決まる。彼は前年、蘆溝橋事件の後、10年間の日本亡命生活を切りあげて、密かに帰国していたのであった。そのことには郁達夫も関与していたようだ。郭沫若本人は、事情の複雑さもあってか、出奔を企てるなど気が進まなかったようであるが、共産党系の人間が政権組織に加わることの意義を説くなど、周恩来らの説得があったらしい。

第三庁の下には、行政関係の部署のほかに、文字による一般的な宣伝を行う第5処、戯劇、音楽、美術など芸術による宣伝を行う第6処、対外（日本および世界）宣伝工作を行う第7処がおかれた。各処にはまた三つの科がおかれていた。第5処の処長はエスペランティストの胡俞之、第6処長は劇作家の田漢が選ばれた。胡俞之は郁達夫とは上海以来の知己であったが、後に南洋へ行き、一時期郁達夫と行動を共にする。1946年シンガポールで「郁達夫の流亡と失跡」を発表し、謎につつまれていたシンガポール脱出以後の郁の足跡と死について報告している。田漢は、郭沫若、郁達夫らと、創造社を作った仲間である。第7処長については、郭沫若は郁を据えるつもりで福州に連絡するが、杭州を経てきた郁の到着は遅く、結局、武漢大学教授で第三党人士の範寿康が就いた。第三庁の正式な成立は4月1日。3月中には到着していた郁は、政治部設計委員という肩書きを与えられるが、これについては後に詳しくふれる。

余談であるが、国民党宣伝部国際宣伝処に対日科というのがあり、第7処と同じような仕事

をしていた。放送を通じて日本兵に反戦を呼びかけた、エスペランティストの長谷川テル（緑川英子）は、そこに属していた。同じ頃、第三庁で働くことになった、反戦作家の鹿地亘は、その後国際宣伝処の方からも招聘を受けていたことを知り、日頃の状況と考えあわせて、事情の複雑なことを感得する。これらは後の第三庁縮小の伏線とも言えるが、見方をかえれば、それが可能であったほど、武漢での抗日の気運が強かったということであろう。

第三庁の主な活動と成果について、主任秘書であった陽翰笙は、以下の点をあげている⁽²⁾。

1. 抗戦拡大宣伝週間を設けた。4月7日からの一週間、それぞれ文字宣伝日、口頭宣伝日、合唱宣伝日、美術宣伝日、戯劇宣伝日、映画宣伝日と決め、さまざまな場所で、これらに応じた形の大衆宣伝工作を行い、最後の日には大規模な武漢三鎮（武漢は武昌、漢口、漢陽の3つの小さな町から成る）デモ行進を展開した。
2. 抗日戦争一周年記念に、募金（原語は「献金」）活動を行った。
3. 前線や後方に、たくさんの演劇隊や宣伝隊、児童劇団などを派遣し、抗日救亡のための宣伝活動を行った。
4. 文協を援助して、国民党支配区文芸界の団結と抗日戦争文芸の発展を図った。
5. 八路军や新四軍（いずれも国民軍に編入された共産軍）に薬品や医療品を送った。
6. 戦地文化服務処を設立し、抗日宣伝品を前線に輸送した。
8. 対日宣伝や国際宣伝を行い、鹿地亘らの日本人民反戦大同盟を援助した。
9. 映画製作所の指導を行い、記録映画や抗戦芸術映画を作った。

第三庁の成立と同じ頃、文芸家の組織である中華全国文芸界抗敵協会（以下、文協とする。）が成立した。これは、「全国の文芸作家が共同

して日本帝国主義の侵略に反対し、中国民族の自由解放を達成し、中国民族の革命文芸を打ちたて、作家の権益を保護することを趣旨とする⁽³⁾もので、抗日戦争開始後、上海などで次々に生まれた、とくに文芸関係の抗日救亡組織の集大成とも言うべく、文学・芸術の各分野を網羅している。五百余人の参加した3月27日の成立大会には、国共両側をにらんだ人選の10数名から成る議長団のほかに、13名から成る名誉議長団があって、蔡元培や周恩来らと並んで、ロマン・ロラン、アグネス・スメドレーの名も挙げられている。

この大会では、大会宣言の採択のほかに、「全世界の文芸家に与える書」や蒋介石への電報、日本の作家への呼びかけの手紙などが披露され、各界代表のあいさつがあった。当時、鹿地亘と妻の池田幸子は上海、香港を経て武漢入りしたばかりであったが、かれらの出現は雷のような拍手を引きおこし、人々は争って握手を求めたという。鹿地は数日後香港の友人にあてた手紙のなかで、自分の存在がどれほど中国人民を勇気づけたかを知り、「生きている」がために任務を負い、「存在する」がために偉大な意味を賦与されることがある、と、自己の歴史的意味を認識するに至った心情を吐露している。⁽⁴⁾

文協は45名の理事、15名の補欠理事を選び、その中の15名の常務理事が実際の運営を任かされた。総務部、組織部、研究部、出版部がおかれ、全体の統括と日常業務は、総務部長の老舎がとりしきった。周恩来は名誉理事になっている。また、成都、香港、昆明、桂林、貴陽、延安その他に、分会がおかれた。

機関誌『抗戦文芸』を発行、全国各地の作家33名が編集委員になった。最初は3日刊であったが、週刊、半月刊のちには月刊になる。また「文章下郷、文章入伍」（文芸を農村に、文芸

を軍隊に）のスローガンの下に、作家たちは戦場や農村へ赴いた。これは「報告文学」すなわちルポルタージュ文学の発展を促したが、一方で、作家たちは民衆とのギャップを思い知らされ、文学者としての作風や思想に、自己変革を迫るものであったようだ。戦争と作家または創作との関係にかかわる論争や、民衆に受け入れられるための、文学形式に関する論争なども、さかんに行なわれている。

こうした状況のなかで、郁達夫は文協の常務理事であり、『抗戦文芸』編集委員のひとりであった。

3. 武漢における郁達夫

郭沫若から第三庁の仕事をするよう誘いを受けた郁達夫は、3月9日に福州を発ち、杭州南方の麗水に疎開している妻子と妻の母を伴って、武昌に赴いた。先に述べたような経過で、第三庁では政治部設計委員という肩書きを与えられる。しかし、「元来、1938年中に彼が就いていた仕事は、すべていわば閑職であり、郭沫若らの場合と同様、その活動は多くの制限を受け、何も出さない有様であった。こうした状況を見て、ついに南洋行きを決心したのだということを、彼自身語っていたという。」（丘帆「郁達夫在南二三事」）⁽⁵⁾

設計委員は何人もいて、そのひとりであった鹿地亘にも同様の思いがあったらしく、後年以下のように述懐している。「そのころの私たち自身はといえば、二人（鹿地と彼の妻—引用者注）とも軍事委員会政治部の設計委員といういかめしい名義をいきなり与えられてはいたが、これは政府が味方にしておきたい知名人を遇する名前だけの地位だった。実際の仕事といえば、ふみ出したばかりの郭や馮（馮乃超第三庁第7処第3科長のこと—引用者注）の役所から時たまとどけられてくる日本向け宣伝文書に眼をと

おしてかえすだけ、あとはほとんど応接と招待の浮き上がった外賓生活で、そんな実のないはなばなしい日々になれない私は、これでよいのだろうかという不安をいつも抱いていた。妻はそのことで、何も自分の役がないといらだち、私に不満を向けた。」⁽⁶⁾ また鹿地の妻は、よそから夫にあてた手紙のなかで、設計委員たちが「のうなし」と呼ばれていたことに言及している。⁽⁷⁾

郁達夫は、文協では研究部主任の任に就く。彼が具体的にどう関与したのかは不明だが、『抗戦文芸』一周年記念号の研究部報告によると、詩歌、小説、戯劇など、ジャンルごとの座談会を開いたり、図書室の整備、公開講演会や戦地工作班のプランをたてる、などの活動があげられている。

この時期、作家たちはしばしば前線に派遣された。郁達夫も4月に台児莊、徐州から、山東、江蘇、江南一帯へ、6月末には浙江東部、安徽南部へ視察に出かけ、「平漢隴海津浦の一帯」⁽⁸⁾ や「黄河南岸」⁽⁹⁾ などのルポルタージュがある。また次章にとりあげるように、論文、雑文もかなり書いている。8月以降、投稿先が主として香港の『星島日報』になるのは、同系列の新聞のために働く数ヶ月先のシンガポール行きと関係があるのかもしれない。

翌年の彼は、当時をふりかえってこう書いている。「……私が武漢で過した5、6ヶ月のことは、まるで一場の夢のようだ。前線をかけめぐった日数は、武昌の寓居に安居していた時間よりも長い。」⁽¹⁰⁾

ただし今までに調べ得た限りでは、やゝ誇張があるようだ。また、これに続いて、以下のような面もあったことを述べている。「しかし、前線から戻り、揚子江を渡って漢口に行くたびに、機会のある限り王瑩女史ととくにコーヒーショップ「美的」⁽¹¹⁾の冷房のきいた部屋で会っ

た。私たちが話し合ったのは文芸や祖国の前途のことで、今思い出すと、まったく隔世の感がある。」⁽¹²⁾

この頃、異なった次元で彼の生活をゆさぶっていたのは、妻王映霞とのトラブルであった。二度めの前線視察から戻った直後、妻との間に行き違いがあり、妻は家出をする。郁は7月5日、6日の『大公報』(武漢)に、「妻が某君と関係し、貴金属類をもって家出をした。早く居所を知らせてほしい。」旨の広告を出す。そして、7月10日には一転して、自分の思い違いであり、謝罪する、という意味の広告を出す。その間、友人たちの斡旋があり、ふたりの間に協議書がとりかわされたようだ。そこにはそれなりの事情と互いの言い分があるのだろうが、結局、巷の格好の話題になってしまった。日本の新聞でも、抗日の中心武漢の雰囲気隠蔽、歪曲するためのまたとない材料としてとりあげている。⁽¹³⁾

折しも武漢攻略を急ぐ日本軍の戦略的展開が行われ、爆撃がいつそう激しさを増していた。政府は人口拡散令を出し、各機関を次々に撤退させた。郁も上記の事件の後問もなく、家族をつれて、湖南省の常德へ行く。しかし常德が湖南西部の要衝であることや生活上の問題もあって、7月下旬には、友人易君左の紹介で、洞庭湖南岸の漢寿に移った。そこではやや落ち着いて生活し、『星島日報』へ投稿する論文をはじめ、魯迅の思い出なども書きはじめる。易君左によれば、この間の夫婦の関係も非常に安定していた、という。⁽¹⁴⁾

9月になると、形勢の危くなった福州の陳儀から連絡を受け、一週間かかって福州に戻る。この途上で、日に幾度となく王映霞に書き送った葉書きが、数奇な運命をたどったあと、最近発表された。⁽¹⁵⁾

9月末に福州に着いた後の郁は、細かいいき

さつは不明だが、シンガポールの『星州日報』から副刊編集のために招かれ、出国を決意する。この時、漢寿にいる妻を呼びよせるが、当時は武漢が陥落し（10月27日）、政府は日本軍の南進を防ぐために「焦土政策」をとりはじめた時で、湖北・湖南一帯の交通は混乱をきわめた。3人の子供と老母を伴った王映霞は動きもままならず、長沙、江山（2週間滞在）など、行く先々で足止めを受ける。夏以来の王の不倫に対する思いこみが高じたのか、この間の郁は、某君がいると考えられる麗水に打電するなど、不可解な行動をとる。シンガポール行きのことも、郁は王の到着まで話さず、数日後には出発する。

このような行き違いはふたりの間の溝を深め、「毀家詩記」（家庭破壊の詩物語）⁽¹⁶⁾という文学作品を生み出す一方で、その発表が同居している妻—作品の主人公はまさに彼女であり、しかも事実即して書いているかのように編まれている—に内緒で行われたことにより、これまでになく強い彼女の憤りを買う。彼女は掲載誌に反論を寄せ、ふたりのことは再びスキャンダル化する。そして破局、離婚へとつながっていったのである。

4. 郁達夫と抗日

郁達夫がシンガポール行きを決意したのについては、さまざまな理由があげられよう。先に述べたように、武漢では仕事がやりにくく、また仕事そのものに飽き足りなかったこともある。王映霞との関係を打開する必要もあった。⁽¹⁷⁾ 国外亡命と見る向きもある。⁽¹⁸⁾ 郁、王とともにシンガポールへ渡った長子郁飛は、「わたしは国内の政治気運が逆行しつつあったことから、家庭騒動の痛手を元に戻すのが難しかったからに外ならないと思う。」⁽¹⁹⁾と述べている。

また当時の雰囲気を知るものとして、郁達夫が、後に抗日の中心になった重慶に戻るよう、

林語堂から誘いを受けた時、否定の気持を伝えたという、以下の言葉も参考になろう。「なぜかというに、私の平素の友人の主張、行動には、当局の諒解できぬ所があるようだからです。旧同僚の雷艇、驢兄などは、『白首相知るもなお剣を按ず』（王維の詩の一節。老人に到るまでの知己でありながら、まだ刀のつかに手をかけている。相手を信じない。—引用者注）で、陳立夫先生（国民党の大物—引用者注）の輩に至っては、なおさら言うまでもありません。」⁽²⁰⁾

ところで、郁達夫がシンガポールに渡る時に作った詩がある。

小 草

生同小草思酬国，志切狂夫敢憶家。
張祿有心逃魏辱，文姬無奈嚙胡笳。
寧辜宋里東鄰意，忍棄吳王旧苑花。
不欲金盆取覆水，為誰憮悴客天涯？

1938年冬

大意

小草（ヒメハギ）

生れを同じくする小草は、国に酬いることを思い、

志の切なる狂夫（おろかな男）は、あえて家を憶う。

張祿（戦国の人）は心あって、魏の辱めを逃れたが、

蔡文姬（漢代の女性。匈奴に嫁した。）はむせぶような胡笳（アシの葉を巻いて作った笛）の音を、どうすることもできない。

どうして宋里、東隣（不明）の意に、そむくことができようか。

今は忍んで、吳王の旧苑の花を棄てるのみだ。金の盆に覆水のかえることは望まないが、誰のために憮悴し、天涯に客となるのであろうか。

典故が多く、意味する所は深いのだろうが、とにかく前半は、異国にて祖国のために尽くすことを、後半は、王映霞との関係を精算しようとしているようにとれる。

こう見てくると、「折衷案的亡命案」とする作家陳舜臣の説は、かなり説得力をもつ。氏は、郁達夫がそれより先に、左翼作家連盟から離れ、やがて杭州に移り住んだことを、「国内にいながら亡命生活をしている」とするのだが、今度の戦火に見舞われた大陸の状況と王映霞とのトラブルも、彼に亡命を思わせる。しかし、祖国が生死の関頭（せとぎわ）にある現在、逃避は許されない。そこで、「南洋へ渡って華僑にたいする抗戦宣伝工作をする」という「行き方」をきめたというのである。⁽²¹⁾

考えてみると、郁が、名士として接待や講演に明け暮れしていた福州をあとに、武漢へ行ってみると、老若の文芸家たちが入り乱れ、国民党と共産党の思惑のからみあった、ある種の体制がすでに組まれていた。彼自身もそのなかで役割をになうが、仕事自体はどうしても自分でなければならないというものでもない。加えて、左翼作家連盟からの離脱や、満州事変・上海事変以後、抗日救亡の気運が高まる一方の上海から遠ざかって杭州へ、杭州からさらに福州へという歩みが示すように、「私小説作家」的体質をもつ彼には、組織活動になじめないところがあつたのかもしれない。長男の郁飛は別の所であるが、「彼の個性は永遠に行政指導に向いていなかった。」と述べている。⁽²²⁾ そのうえ王映霞とのことがスキャンダルになり、日常生活レベルでいたたまれない思いもあつたであろう。しかし、中国人として、作家としての誇りは、抗日を促してやまない。彼が新天地を求めたのは、当然の成り行きと言えるかもしれない。シンガポールに着くやいなや、『星州日報』の付録『晨星』（朝刊）や『繁星』（夕刊）を足場

に、精力的に書いている。

ところでいったいに中国人は、自己の歴史的役割を重んずる、言葉をかえて言えば、後世の人にどう評価されるかを非常に気にすると言われ、それは筆者の日常生活レベルの体験でも痛感させられたことである。そのため立場上の発言というものに細心の注意が払われ、また自己の客観的な立場の把握に秀れていると思う。それは表現力と密接な関係があり、表現されない感情は、感じなかったのに等しい。それは陳舜臣の指摘するように、「証拠とか記録のたぐいを、極端に重視する……大袈裟に言えば、食事をしているところを他人に見られなければ、食事をしないのに等しいという考え方なのだ。歴史に記録されない事件は、それがおこらなかつたといわれても仕方がない。」⁽²³⁾ というところまで敷衍される。

武漢にいる時、郁達夫は『日本評論』1938年3月号に掲載された佐藤春夫の「アジアの子」という映画物語が、郭沫若と自分をモデルにしていることを知る。これを読んだ郁は激怒し、日本の娼婦と文士⁽²⁴⁾を書いて、「平素は日本の優秀分子である文人たちが、日中交戦の関頭に至って、醜態をさらけ出した。」と罵倒し、日本民族また日本文化は世界的レベルに達することができないがことが知れた、と言いきった。以下に、彼が紹介した内容を訳出する。

汪という姓の革命文学者が、17、8年の国民革命軍北伐の後、日本に流亡し、日本人妻と十余年にわたる追放生活をおくる。元來彼が学んだのは医学であり、彼の妻は大学で助産学を学んだのであつた。子供たちも成長し、上の二人はすでに第一高等学校に入っている。ある晩秋の暮れ方、鄭という彼の中国人の友人が、突然彼の寓居を訪れる。この鄭の使命はつまり中国の最高首脳の密命を受け、

中国に帰って抗日の宣伝をするようにと、彼を扇動することであった。

ついに蘆溝橋事件が勃発した。汪はこっそり妻子に書き置きを残し、ひとりで中国に逃げ帰る。各地で幾多の激しい抗日宣伝活動を行う。

結局、彼は自分が人に利用され、あやつられていたことに気がつく。そうして自分が報復の犠牲に供されているとも感じる。いっそう彼を落胆させたのは、彼の北伐時代の恋人が、彼の親友鄭に騙されて妾にされ、杭州の金屋に囲われていることだ。

そこで彼は翻然として改め、自分を華北人民救済の職務につけるよう日本に要求し、北通州に日本式の病院を建てる。日本軍の庇護の下、日本人妻を通州へ再び迎える。

郁達夫の怒りは、「この中で、彼（佐藤春夫——引用者注）は至るところ、日本皇軍の勝利と日本女性の愛国愛家の人格の高尚さを声高に自慢している」一方で、汪を日本の中国侵略の協力者として、鄭を友を裏切る悪者として、汪の愛人を節操のない女として描いていることに向けられる。佐藤春夫の側からすれば、当時の状況では、主人公が日本に協力するという書き方しかできなかったのかもしれないが、それにしてはモデルを誤ったようだ。相手側にとっては、最もあってはならない、厭うべきあり方であった。ましてや、作者は、郁達夫にとって、師とも兄とも目してきた人であった。

ここには、郁や鄭がモデルにされ、奸漢や悪徳人物に仕上げられという個人的なことよりも、（立場というものを考える時、それもあつたかもしれないが）悪意でなくこういう作品を生み出す、日本人の歴史認識の甘さ、立場に対する信念のもろさ、そこから来る相手の立場への思いやりの欠如、そうしてこれら諸諸に見い

出される日中民族の埋めがたい溝に対するいらだちがあつたのではないだろうか。モデルの件だけならば、郭沫若のほうが怒りも大きかっただけで、郁達夫に詳しい作家の小田嶽夫も、「今になって気付いたことだが、そして不思議なことのようにさえ思えるのだが、私はあの作品（「アジアの子」——引用者注）を発表当時読んださいには別にへんだとも、残酷だとも感じなかったのである。」⁽²⁵⁾と書いている。これは戦時の異常な雰囲気^{インフ}に左右されたということもあろうが、民族性もあるのではないかと思う。

蛇足かもしれないが、王映霞が、自分を誇るような郁の「毀家詩記」（「家庭破壊の詩物語」）に対し敢然と抗議したのも、自己の尊厳を守るために、（中国式に言えば面子^{インツ}のために）立場上、当然のことであった。それはフィクションの許されるひとつの文学世界であるとはいえ、王は実名で描かれ、事実として読まれても仕方のないものであった。しかし、事実関係にかなりの粉飾がほどこされていた、いな王から言えば捏造に近いものであった。

王が反論のなかで、「……同時にまた、あなたが私のこの長い手紙を読んだあと、自分の一切の誤ちを悟り、前非を悔いて、もう一度まともな人間になることを切望します。ゆめゆめこれ以上日本式の圧迫を私の上に加えて、陰險残酷な無頼文人となることのあるありませぬように。」⁽²⁶⁾（傍点引用者）としているのも、考えさせられることである。

シンガポールで一時期郁達夫といっしょだった胡俞之によれば、「達夫はいつも、自分は日本人をよく理解しているが、日本人の本質はけっして悪くはない。ただ、今は民族の問題なのだ。民族問題という点では、日本人は中国人を平等な人間と見なしたことはなかった、と言っていた。」という。胡の論点は、このように民族問題と人間の本性の問題を区別した郁の

甘さが、結局自らの死を招いたのだとする。⁽²⁷⁾

しかし、作家の立場の郁達夫は、この危険性を十分に承知していたと思う。たとえば、日本の新聞社の企画で、新井格から手紙をもらった時は、自分の返信が日本での宣伝材料に使われることのないよう、まず自分の編集する『晨星』に経過報告を付して公開するなど、布石をうっている。そして論調も、新井のもち出した「“人間性”は共通の問題である」という論をたくみにかわし、抗戦期に成長しつつある中国の民衆や文芸について書いている。⁽²⁸⁾

1936年晩秋に訪日した際、郁達夫は何ヶ所かで講演したり、また日本の新聞にも評論をよせている。そのなかのひとつで、⁽²⁹⁾彼は今後の日中関係を論じている。そこでは、中国の共産党勢力および共産化の可能性を過小評価し、(本心か、状況を考えた立場上の発言か、筆者には不明。) そのうえで日本の見当違いとして2点をあげる。まず、日本の軍事侵略が、共産勢力の侵入を防止するものと言いながら逆にその激発と堅固化を促している、という事実。2. 抗日論者を一律に共産党とよぶこと。日本が侵略するから抵抗するのであって、侵略がやめば、抗日もやむはずだ、という。そして、日本の言論界が排日抗日と誇大に騒ぎたてるため、逆に中国人の抗日熱をあおっている、と指摘する。

これについて、小田嶽夫は、「達夫の文章の目的は日本の軍事侵略を止めさせることに在り、侵略を止めさえすれば、中国共産党は成長する機会が少くなり、日本にとっても不安はなくなる筈だ、というのが根本要旨である。」とし、常識的な一国民政府の政治家或いは官僚の言いそうなことにすぎず、しかもこれは本心と思えるから、杭州以後、再度の“逆もどり”を示すものである、と捉える。⁽³⁰⁾

しかし、見方をかえれば、そのような状況にあった彼でも、言うべきこととして言わざるを

えなかった、とも言える。中国人の彼にとって、抗日は最後の守るべき一線なのではなかったろうか。闘い方は大勢とは異なり、結果として死につながってしまったが、それら総体が彼の抗日の形であったとも言える。

今日、国際社会のなかで日本人の言動が何かと取り沙汰されていることであるが、郁達夫の抗日への係わりはいろいろな意味で示唆を与えてくれるように思える。われわれは、日本人という立場を、もう少し正確に認識する必要があるのかもしれない。

注：

- (1) 略歴の部分は、拙論「郁達夫の恋——『過去』にふれて」(『文学空間』Ⅱ-3, 1986, 7所収)の該当部分に加筆訂正したものを再録した。
- (2) 「第三庁——国統区抗日民族統一戦線の一つ個戦闘保舉」(『新文学史料』総9, 1980, 4所収)
- (3) 藍海『中国抗戦文芸史』現代出版社、民国36(1947)、9。
- (4) 鹿地亘『抗戦日記』九州評論社、1948。
- (5) 伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫『郁達夫資料補篇』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、昭48、3、p57による。
- (6) 鹿地亘『火の如く風の如く——解放への道——』講談社、1958、p23。
- (7) 注(4)参照。
- (8) 『抗戦文芸』第1巻第2期、1938、5、7所収。
- (9) 『烽火』17期、1938、7、1所収。
- (10) 「再見玉瑩」原載『星州日報』1939、10、2、後に『郁達夫抗戦詩文抄』福建人民出版社、1982、12に納む。p50。
- (11) この店の名は鹿地亘の『抗戦日記』(前出)にもしばしば登場する。フランス租界にあった。
- (12) 注(10)参照。
- (13) 『読売新聞』昭和13年8月24日第一夕刊。「陥落前夜・狂乱の漢口」シリーズの(2)で、「底なき頽廢

- の泥沼ノ爛れた愛欲，郁達夫の“妻に告ぐ”の見出しがある。
- (14) 『達夫書簡——致王映霞』天津人民出版社，1982，5. p 117.
- (15) 注(14)参照.
- (16) 『大風旬刊』30期，1939，3，香港に原載。後に，いくつかの単行本に所収。『日本評論』1940，1に訳がある。p 227.
- (17) 劉心皇『現代中国史話』台湾・正中書局，民国60年（1971），8，p 364. 王映霞「郁達夫与我婚變經過」（馬彦達編『郁達夫婚變前後』香港・広角鏡出版社，1983，4.『郁達夫抗戰詩文抄』（前出）の許傑の序文など.
- (18) 趙国「郁達夫及其創作散論」（王自立，陳子善編『郁達夫研究資料』上下，天津人民出版社，1982，12所収. p 649.）
- (19) 郁飛「雜憶父親郁達夫在星州的三年」（『新文学史料』5，1979，11所収. p 156.）
- (20) 郁雲『郁達夫伝』福州人民出版社，1984. p 147.
- (21) 陳舜臣「スマトラに沈む」（『オール讀物』20巻12号，1965，12原載.『紅蓮亭の狂女』角川文庫，昭56，1所収. p 43.）
- (22) (19)参照. p 167.
- (23) 陳舜臣『銘のない墓標』徳間文庫，1985，11. p 72.
- (24) 郁達夫「日本の娼婦与文士」（『抗戰文芸』1巻4期，1938，5，14所収.）
- (25) 小田嶽夫『郁達夫伝——その詩と愛と日本』中央公論社，1975，3あとがき.
- (26) 王映霞「請看事实」（郁達夫，王映霞『郁達夫日記九種及其他』香港宏業書局，1963，4所収.）
- (27) 胡俞之「郁達夫の流亡和失跡」（王自立・陳子善編『郁達夫研究資料』天津人民出版社，1982，12所収. p 88.）
- (28) 郁達夫「敵我之間」（『郁達夫抗戰詩文抄』福建人民出版社，1982，12所収. p 208.）ただし，結局日本では発表されなかったらしい.
- (29) 郁達夫「日本の朝野よ支那を見直せ」（『大阪毎日新聞』昭和12年1月4日第十一面所載.）
- (30) 注(25)参照. p 163~164.